

ようこそ

Moogerfooger®エフェクトプラグインの世界へようこそ。これは、DSPを使用してBob Moogのクラシックアナログエフェクトモジュールを芸術性を持って再発明し、オリジナルのハードウェアエフェクトの伝説的な効能と音楽性をデジタル音楽制作環境にもたらしめます。

オリジナルハードウェアのMF-104 Analog Delayは、Moogerfoogerエフェクトのクラシックラインとして2000年にリリースされました。この豪華なオールアナログディレイは、40ミリから800ミリ秒のディレイタイムを提供するデュアルレンジのBBD (Bucket Brigade Device) 素子が組み込まれています。後期バージョンではテンポ同期と、マルチ波形LFOを介した広範なタイムモジュレーションオプションが提供されました。すべてのパフォーマンスパラメーターは電圧制御できるため、プレイヤーはエクスプレッションペダルやその他のCVソースを使用してエフェクト設定を操作しながら「演奏」することができ、MF-104を単純なエフェクトではなく、演奏楽器の一部でもあることを示します。

MF-104Sは、この設計を保持し、すべてのパラメーターは演奏、操作、オートメーション、モジュレートする事が可能で、活発で真の音楽パフォーマンスを生み出します。MF-104Sは、オリジナルの温かく有機的な質感とオリジナルアナログ回路の特徴を捉え、それに21世紀の柔軟さと使いやすさを加えました。そして、今では希少で切望されているオリジナルハードウェアユニットとは異なり、プロジェクトで好きなだけ数だけ簡単に加えることができます！



アナログディレイとは？

ディレイ回路は、受信した信号を短時間でそのオーディオ信号のレプリカを生成します。元の(ダイレクト)信号とディレイ(遅延したレプリカ)信号を一緒に聴くと、ディレイ信号はダイレクト音のエコーのように耳に届きます。徐々に消える一連のエコーを作成するには、ディレイ出力信号を入力に戻して、そのディレイ信号のレプリカを生み出します。このことをフィードバックと呼びます。ディレイ回路のディレイタイムを調整することで、エコーの距離を決定します。遅延回路の出力から入力へのフィードバック量を調整することで、エコーの消滅速度を調整できます。さらに、直接信号と遅延信号のミックスを調整することで、エコーの音量を決定します。

現在、ディレイデバイスには、テープ、アナログ、デジタルの3種類が存在します。最初のディレイデバイスは、ディレイの作成に磁気テープを使用しました。音は動くテープに録音され、テープが数インチほど動いた後に再生してディレイ効果を生み出します。その後、70年代初頭に、大規模な半導体アナログディレイ回路が利用可能になりました。これらは、オーディオ波形を数千の回路セルのチェーンに渡すことによって機能し、火を消すための水のバケツリレー(Bucket Brigade/バケツ消防隊)に例えられたため、BBD (Bucket Brigade Delay)チップと呼ばれる由来となりました。このチップ内のセル1つ1つが小さなディレイをもたらし、このセルの数と波形の「クロック」やセル間の移動速度によってディレイの長さを決定づけます。アナログディレイは、テープエコーユニットよりもノイズが少なく、使いやすく、信頼性が高く、より広く使用されるようになりました。

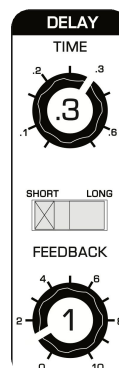
近年では、デジタルディレイが標準となっています。デジタルディレイユニットでは、音声信号はデジタル化(デジタル変換)されます。その数字は一定期間デジタルメモリーに保存され、その後、ディレイ出力のためのオーディオ波形として再構築されます。アナログのBBDディレイは、クロッキング信号が歪みを引き起すため、必然的にトップエンドの一部をロールオフさせることで、ディレイ出力はまるやかで暗い音色になります。デジタルディレイは、ほぼ脚色なしで元の信号を遅らせることが可能で、アナログ方式よりも入力音の忠実度を維持します。

従いまして、MF-104S Analog Delayの設計が特別です。これはハードウェアのMF-104ペダルで使用されるオリジナルのBBDアナログディレイを複製したデジタルディレイです。オリジナルのMF-104の癖や明確な音色特性を再現しますが、スイッチ切り替えて、その魅力とデジタルの透明感のある音色の両方の長所を組み合わせることも可能です。

ディレイラインを知る

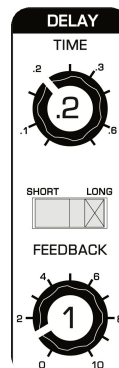
このセクションを通して、イラストで示されているようにコントロールを調整して、異なるディレイライン設定がオーディオ出力にどのように影響するかを確認します。ディレイ効果を確認する間、LFOセクションのAMOUNTノブを0に保ち、LFOによる影響をオフにします。

図のようにディレイラインの設定を調整し、楽器を演奏します。この設定は典型的な「スラップバック」エコーです。次に、FEEDBACKコントロールを5に上げ、もう一度楽器を演奏します。一連の急速に変化するエコーを耳にすることができます。FEEDBACKを増やすと、ディレイ信号がより多くディレイ回路に送り返されます。これは、より長い一連の繰り返しを意味します。



次図のように設定をもう一度調整し、演奏を開始します。再びスラップバック効果が耳に届きますが、ディレイ音は暗めです(高音が少ない)。そして、再びFEEDBACKを5に上げて、エコーを聴きながら演奏すると、その違いを明確に気づくでしょう。

オリジナルハードウェアのMF-104は、SHORTとLONGのディレイ範囲が重なるように設計されており、SHORT設定はより高い周波数特性を有します。このスイッチ切り替えによって、同じようなディレイタイム領域で、ディレイ音の音色特性を微調整する機能として扱うことが可能になります。

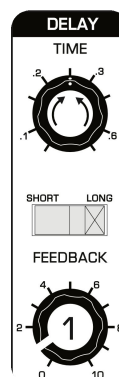


TONE設定を調整することで、MF-104Sの両方のディレイ範囲でフル(の音色)帯域幅を保持できます(後記の設定を参照)。

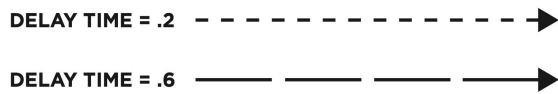
次に図例のように、TIMEコントロールを回しながら楽器を演奏してみましょう。ディレイ信号の変化に伴うピッチ変化が一時的に発生し、その後、演奏ピッチに戻ります。

TIMEノブを操作してディレイタイムを変更すると、(クロック)振動の加速や減速によって、信号はディレイ回路を通過する際に引き伸ばされたり圧縮されたりします。つまり、TIME変更は、信号が、MF-104Sの仮想BBDを通過する速度を決定する仮想オシレータークロックレートを変更することを意味します。

もう少しTIMEを操作しながら楽器演奏をしてみましょう。



もう少し時間をかけて、TIME、SHORT/LONGスイッチ、FEEDBACKを操作して、さまざまな設定を試してみましょう。



ここで気づく点がいくつかあります:

SHORT/LONGスイッチのポジションを変えると、ディレイタイムが半分または2倍になります。従いまして、現在ディレイラインにあるディレイ信号は半分に圧縮されたり、2倍に延長されたりします。この際、ディレイ信号のピッチが1オクターブ上または下にシフトします。

FEEDBACKコントロールは、ディレイ信号出力の一部をディレイラインに戻して混ぜ合わせることで、一連のエコーを作成します。コントロールを約**8**に設定すると、エコーは無限に持続するようになります。そして、この**8**以上の**FEEDBACK**設定によって、エコーの蓄積によって濃密なエレクトリックテクスチャー効果を生み出します。

LFOを知る

オリジナルハードウェアのMF-104およびその後継であるMF-104Zペダルには、ディレイラインとさまざまなフィードバックコントロールのみを装備します。2012年にリリースされたMF-104Mは、ディレイラインにモジュレーションを与えるための広範なLFOセクションが追加されました。LFOはLow Frequency Oscillator(低周波オシレーター)の略です。LFOは、一般的に電子音楽楽器でビブラートやトレモロなどの遅いモジュレーションを作成するために使用されます。MF-104SのLFOはディレイタイムのモジュレーションに用いられ、0.05Hzから50Hzまでの範囲で設定できます。

まず、このセクションの図の設定と一致するように設定を調整しましょう(プリセットの「Vibrolay」をロードで即座にこの設定にできます)。

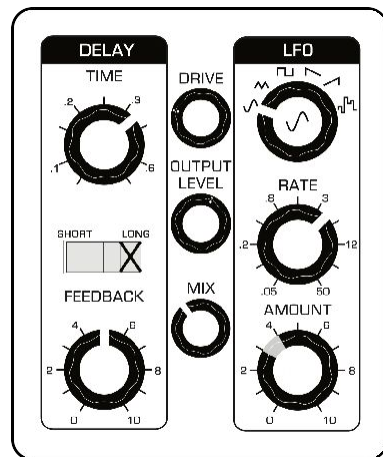
AMOUNTを0まで下げ、特徴的なディレイ効果を確認するためにいくつかの音の再生または演奏をします。

そして、**AMOUNT**を上げると、ディレイタイムがモジュレーションによって変化し始めるのを確認できます。

AMOUNT値1付近では効果は淡く、9まで上げると非常に極端になります。MF-104のアナログ性質によって、ディレイタイムの変化は、ディレイラインの拡大と収縮によってピッチシフトをもたらすため、より大きなモジュレーション量は、結果として、ディレイタイムの変化とそれによって生じるピッチシフトの両方の範囲が増加します。

RATEノブを遅くした場合、ディレイタイムのモジュレーションは穏やかで、**RATE**を可聴範囲(20Hz以上)に上げた場合、劇的な響きの変化と効果を耳にできます。次に利用可能なLFO波形(WAVEFORMS)も探索していきましょう。波形の違いを確認する際、**RATE**を約0.4Hz前後にすると良いでしょう。**SINE**(正弦)波と**TRIANGLE**(三角)は、連続した穏やかなディレイタームの変化をもたらします。**SQUARE**(矩形)波は2つのディレイタイム設定間のジャンプします。**RAMP**(ランプダウン=逆鋸)と**SAW**(鋸 = ランプアップ)はそれぞれ、ディレイタイム短縮とピッチの下降効果とその逆の増加と上昇効果をもたらします。最後の**S+H**(サンプル・アンド・ホールド)は、LFOが再起動するたびにランダムモジュレーション適用します。

短いディレイタイムとLFOの組み合わせで、コーラスやフランジャー効果を得ることができます。まずは少量の正弦波モジュレーションで試してみましょう。極端な矩形波モジュレーションと長いディレイタイム設定では、奇妙なピッチシフト効果を生み出し、高速**S+H**モジュレーションに高**FEEDBACK**設定の組み合わせは、濃密な音の壁が出現します。このLFOとDELAYセクションの強力な組み合わせを、オートメーションによる成形、鑄造、拡張したりすることで、ディレイを超えた広範囲のエフェクト効果の再現のみならず、自分だけの新しいエフェクト効果の創造にも役立ちます。



パネル機能

MF-104S Analog DelayのメインUIウィンドウには、パフォーマンスコントロールとインジケータライトが含まれています。

Delay (ディレイライン) セクション

TIMEは、**SHORT/LONG**(ディレイ範囲)スイッチ設定に基づく、ディレイラインからの取り出したディレイの長さを設定します。**SHORT**モードでは、**AMOUNT**を0に設定した場合、**TIME**設定範囲は約8から400ms(ミリ秒)の間になります。**LONG**モードでは、利用可能な範囲は、倍の16から800msになります。ディレイタイムはLFOを介してモジュレーションされ、その設定範囲と変化によってさまざまな効果が生み出します。

RANGEは、ディレイタイムの範囲を決定づける**SHORT/LONG**スイッチで、それと共に音質の明暗も決定づけます。**SHORT**設定の場合は明るめのフィルターが適用され、**LONG**モードでは、暗めのフィルターが適用されます。また、演奏中にこのスイッチを操作すると、「フィードバックループ」のサウンドピッチのオクターブシフトが発生します。**SHORT**から**LONG**に切り替えた場合は1オクターブ下、**LONG**から**SHORT**に切り替えた場合は1オクターブ上にソフトします。それと同時にディレイタイムも倍に伸張、または半分に収縮します。

FEEDBACKは、**BBD**の入力に送り返す(フィードバック)するディレイライン出力の量を設定します。フィードバックは、オフ(0)、そしてスラップバック/シングルリピートから連続リピート(設定値約3:00)までが、一般的なディレイフィードバック設定で、3:00以上に設定すると、フィードバックによる自己発振とディレイサウンドの膨張効果を提供します。

注:8以上のFEEDBACK設定は、ユニットが自己発振する可能性があります。



LFOセクション

LFOの最初のコントロール(**WAVEFORM**)は、ディレイタイム・モジュレーションに使用するLFO波形を選択するための6ポジション・ロータリースイッチです。左から正弦、三角形、矩形、ランプ、鋸歯、およびS+Hモジュレーションが用意されています。

実際に試す前に予備知識としてこれらの波形を理解しておきましょう。

WAVEFORMコントロールの左からリスト順に以下の通り説明をします:

- ◆ **Sine**(正弦) - 倍音の無い、ピークへの変遷が滑らかな曲線の周期の波形です。モジュレーションソースに使用した場合、ビブラートやトレモロ効果を生み出します。
- ◆ **Triangle**(三角) - ピークへの変遷が直線的な(三角形)周期の波形です。モジュレーションソースに使用した場合、正弦波に似ていますが、奇数倍音を生み出すため、音色がより鋭くなります。
- ◆ **Square**(矩形) - 2つの状態を等間隔、ほぼ瞬時に交互する波形です。モジュレーションソースに使用した場合、オクターブやその他のピッチシフト効果を作成します。
- ◆ **Sawtooth**(鋸歯) - 非常に迅速にピークに達し、そしてゆっくり下降変遷する波形です。
- ◆ **Ramp**(ランプ/逆鋸歯) - 逆相の鋸歯波形で、ピークまでゆっくり上昇変遷し、ピークに達すると鋭く最小まで下がります。
- ◆ **S+H**(サンプル・アンド・ホールド) - ランダムステップとも呼ばれる、波形の高さ(振幅)と上下がランダム変化する特殊な矩形波です。

RATEは、LFOモジュレーションの速度(発振周期)を決定します。周波数範囲は、非常に遅い0.05Hzから50Hzのに及び、LFO Sync機能を備えます。LFOの速度はノブ左上のインジケータの点滅で確認できます。

AMOUNTノブは、ディレイタイムのモジュレーション量(LFO波形の適用量)を決定します。

注:LFO AMOUNTノブが左一杯の場合、LFOによるモジュレーション効果はありません。



オーディオレベルとミキシング

DRIVE、OUTPUT、MIXコントロール、LEVELインジケータはすべて、オーディオレベルとミキシング回路に属します。

DRIVEコントロールは入力ゲインを調整します。インストゥルメントやオーディオソースの出力を、このプラグインで適切な効果が正しく得られるための入力ゲイン調整に使用します。入力信号が強い場合はこのノブを左方向に回し、弱い音源の場合は右方向に回します。DRIVEレベルを意図的に上げた場合は、オリジナルのMoogerfoogerの入力段と同じ、暖かいアナログクランチによる、サチュレーションと歪みをもたらす可能性があります。このDRIVE回路はENVELOPEセクションにも影響し、DRIVE設定が高いほど、より強力なエンベロープ・フォロー効果を得ることができます。

LEVELインジケータは、DRIVEコントロールによって調整された後の入力信号の強度を示します。信号レベルの上昇に応じて、インジケータは消灯状態から緑、黄、そして最後に赤色に点灯します。非常に弱い信号の場合、消灯状態になります。緑色に点灯した場合、信号は音の歪みをもたらすレベルに達していないクリーンな状態を示します。黄色に点灯した場合、軽めな歪み共に暖かいアナログ品質がサウンドに与えられる可能性があります。赤色に点灯した場合、歪みの発生に十分な強さのレベルであることを示し、明確な歪みを確認できます。DRIVE設定で目的の効果を得る際、このインジケータの状態を参考にすると良いでしょう。

OUTPUTノブの下にあるLINKボタンをクリックすると、DRIVEノブとOUTPUTノブがリンクされ、相反する動作をします。DRIVEを上げて入力に歪みを加えた場合、この歪みによる倍音の発生とともに音量も上がります。この際、この次に続くプラグインの入力やチャンネルがレベル過多にならないように、OUTPUTで出力レベルの調整をしますが、LINKをオンにすると、DRIVEを上げると、OUTPUTは下がり、OUTPUTを上げるとDRIVEが下がるようになり、このプラグイン内の全体的なレベルの一貫性を保つことができます。

MIXノブは、入力(DRIVE段後の)信号とディレイ信号のバランスを取る際に使用します。右一杯に回した場合、ディレイ音のみになります。意図的に左一杯に設定することで、このプラグインをサチュレーターやオーバードライブとして使用できます。音源ソースの質感を保持しつつ、強烈な効果を得る際は適切な中間値を見つけて設定をします。



スイッチ

TIME SYNCスイッチは、ディレイタイム設定をプロジェクトのテンポに同期できるようにします。TIME SYNCインジケータが点灯している場合、TIMEノブは、マスターテンポに対する音楽的な間隔(音符)でディレイタイムを設定し、SHORT/LONGスイッチはTIME設定の半分または倍を定義します。TIME SYNCインジケータがオフの場合、TIMEはマスターテンポとは同期しないミリ秒(ms)単位でディレイタイムを設定します。

注: MF-104Sの最大ディレイタイムは800msです。同期をした場合、MF-104Siは音楽的な時間分割をインテリジェントに適應させ、遅延ラインの制限内にとどまり、プロジェクトのテンポに基づく全範囲の音楽間隔のタイム設定を提供します。


ACTIVEスイッチは、オーディオ入力をディレイラインに送るかどうかを設定します。オンにした場合ACTIVEインジケータが緑色に点灯し、エフェクト効果が適用されることを示します。ACTIVEインジケータが消灯した状態は、オーディオ入力がディレイラインに送られず、直接出力に送られることを示します。

注: エフェクトがオフの場合でも、CV出力は引き続き機能します。ペダルを完全に無効にするには、DAWが提供するバイパス機能を使用します。

注: NormalとSpilloverの2つのBYPASS(バイパス)モードが用意され、ACTIVEインジケータオフ時のディレイラインの扱いを決定します。BYPASSモードの設定は設定パネルでおこないます。BYPASSモードに関する説明は、後記の設定パネルセクションに記載しています。

LFO SYNCスイッチは、LFOレートをプロジェクトのテンポに同期できるようにします。LFO SYNCインジケータが点灯している場合、LFO RATEノブは、マスターテンポに対する音楽的な間隔(音符)設定になります。LFO SYNCインジケータがオフの場合、LFOはマスターテンポとは同期しない自由な動きになり、RATEノブはLFO速度をHz(毎秒サイクル)で設定します。

高度なプラグイン機能

MF-104Sには、パネルに表示されたコントロール以外の追加機能が提供されています。アクセスするには、プラグインウィンドウの右上の設定アイコン  をクリックします。ペダルの上にあるCVジャックの行または設定アイコン横の「CV」ボタンをクリックすると、MF-104Sの「バックパネル」が表示され、モジュレーション入力コントロールが表示されます。

モジュレーション入力

オリジナルのMoogerfoogerエフェクトは、伝統的なモジュレーションスタイルのエクスペッションペダル、あるいは他の制御電圧(CV)ソースを接続して使用する、パラメーターの電圧制御のための入力ジャックを装備します。MF-104Sは、プロジェクト内のMoogerfoogerエフェクトプラグインの任意のインスタンス間で接続できる仮想「CV Ins」を装備することで、このダイナミック・コネクションのコンセプトをプラグインの世界に提供します。



注: CV接続はDAWプロジェクトに保存されますが、各Moogerfoogerエフェクトプラグインのプリセットには保存されません。

MF-104Sは、CUTOFF、RESONANCE、ENVELOPE AMOUNT、およびMIXにモジュレーションをかけるためのCV入力を提供します。これらのCV INジャックの1つをクリックすると、利用可能な接続オプションが表示されます。

ヒント: オリジナルのMoogerfoogersと同様、ペダルをそれらのコントロールに接続して、フロントパネル操作よりも興味深い音の相互作用を創造することができます!

有効なすべてのMoogerfoogerエフェクトプラグインのインスタンスはドロップダウンメニューに、それらが提供するモジュレーションソースと共にリスト表示されます。各プラグインインスタンスは、一意のランダム生成された4文字のコードによって、このメニューで識別されます。同じコードが、CV入力ジャックパネルの右下隅にあるプラグイン自体の「バックパネル」UI(ユーザーインターフェイス)に表示されます。このことで、同じプラグインの複数インスタンスを区別できます。接続するにはリストからモジュレーションソースを選択します。

選択したモジュレーションの強度(深さ)は、各CV INジャックの下のバイポーラノブによって制御され、12時設定はゼロ(モジュレーションなし)で、ノブを右に回すと正方向でモジュレーションが増加し、ノブを左に回すと負の方向でモジュレーションが増加します。

ヒント: これらのアッテネーターノブはダブルクリックで、設定値をゼロにリセットできます。

Moogerfoogerエフェクトプラグインのインスタンスリスト上には、いくつかの追加オプションと入力ソースが用意されています:

- ◆ **None** - このCV入力の接続をすべて取り除きます。
- ◆ **Bipolar** - 選択したモジュレーションソース(例えばLFO)がバイポーラ(双極)である場合、オプションとして利用可能になります。この場合、現在のノブ値を中心にモジュレーションで値を増減します。
- ◆ **DC** - 関連するアッテネーターでスケールリングできるDCオフセットを提供します。CVアッテネーター自体はオートメーションまたはMIDIマッピングができるため、これをエクスペッションペダルのように使用できます。この場合、選択したプリセットに関係なく、パラメーターに同じ範囲のオートメーション/モジュレーションを提供します。
- ◆ **Side Chain** - 別のトラックからの独立したオーディオ信号をモジュレーションソースとして使用します。ステレオ信号の場合は、その左入力または右入力を選択できます。ホストソフトウェアには、サイドチェーン入力プラグインへの追加入力として表示され、選択したオーディオソースに接続できます。

注: CVサイドチェーンは、DCカップルのアナログまたはデジタルCV信号を受け取るように設計されています。通常のオーディオ信号を使用することで、驚くべき結果をもたらす可能性があります。

モジュレーションの視覚化

CV接続をおこなうと、Moogerfooger上部に仮想の1/4インチケーブルが挿入されます(「CV」のクリックやペダルの上部のジャック列のクリックしてバックパネルを展開表示した際にも表示されます)。モジュレーション信号の着信は、コネクタに黄色でそのことを示します。さらに、モジュレーション接続したパラメーターにノブが存在する場合(すべてのパラメーターがノブコントローラーではありません)は、モジュレーションによる現在値を示す白い円を表示します。

設定

TYPE

TYPE設定は、左右のステレオチャンネル間のディレイ・フィードバックの処理方法(扱い方)を決定します。ECHOは、左右のチャンネルが分離され、同じディレイタイムを適用する通常のステレオディレイモードです。PING-PONGは、ディレイ信号が左右のチャンネル間で交互に繰り返す、いわゆるピンポンディレイ効果を生み出します。

STONE

STONE設定は、ディレイオーディオ信号のEQ、フィルター、および粗さに影響します。オリジナルハードウェアのMF-104は、アナログクロックによって駆動されるアナログBBDを使用し、クロック周波数が可聴範囲(約1.7~3kHz)にあるほど低いいため、クロック信号を耳にできないように、ディレイオーディオに強いフィルターを適用する必要がありました。このことでオリジナルのMF-104に特徴的なダークトーンが与えられ、LEGACY設定によってMF-104Sで再現します。ANALOGは、信号のトップエンドをより保持した暖かいアナログディレイサウンドを提供します。MODERNは、私たちが愛すべき有機的で弾力性のあるアナログディレイの特徴と挙動を残したまま、明るく鮮明な全帯域幅のディレイサウンドを提供します。

TIMING

TIMING設定は、LOOSEに設定すると、BBDディレイのタイミングにアナログオシレーターの揺れに似たわずかな不安定性を追加します。STRICTは、不安定性を取り除いた正確なディレイタイミングを提供します。

LFO POLARITY

この設定はLFOの極性、ゼロ値を中心とした正負設定の動作にするか、ゼロ値を最小値にした正方向のみに作用するかを決定します。BIPOLARに設定した場合、LFOモジュレーションによって、ディレイタイムを設定値を中心とした増減を適用します。UNIPOLARに設定した場合は、LFOモジュレーションがディレイタイムの設定値から増方向のみに作用します。つまりこの場合、TIMEの設定値は、LFOサイクルの最低点となります。

BYPASS MODE

BYPASS MODE 設定は、ACTIVEスイッチをオフにした際の動作を制御します。ACTIVEインジケータが点灯している場合、ディレイはアクティブで、ACTIVEインジケータが消灯している場合、ディレイはバイパスされます。ディレイがバイパスされると、MF-104Sに入ってくるオーディオはディレイラインに送られず、出力に直接(DRIVEおよびOUTPUTコントロールの影響を受けない状態)送られます。

BYPASS MODE をNORMALに設定した場合、ディレイラインのオーディオ出力もミュートされるため、このプラグインの入力信号のみを出力し、まるでMF-104Sがトラックに追加されていないかようになります。バイパスモードをSPILLOVERに設定した場合、ディレイラインからのオーディオ出力は継続され、ACTIVEをオフにするまでの信号によるエコー「トレイル」が聴こえます。ただし、新しいオーディオ信号はディレイラインから遮断されます。SPILLOVERモードは、ACTIVEスイッチを効果的に使用する際に有用です。

補足操作

コントロールのダブルクリックで、設定をデフォルトポジションにリセットします。

CTRLキーを押しながらのコントロール操作で、より高精度な設定値の微調整が可能です。

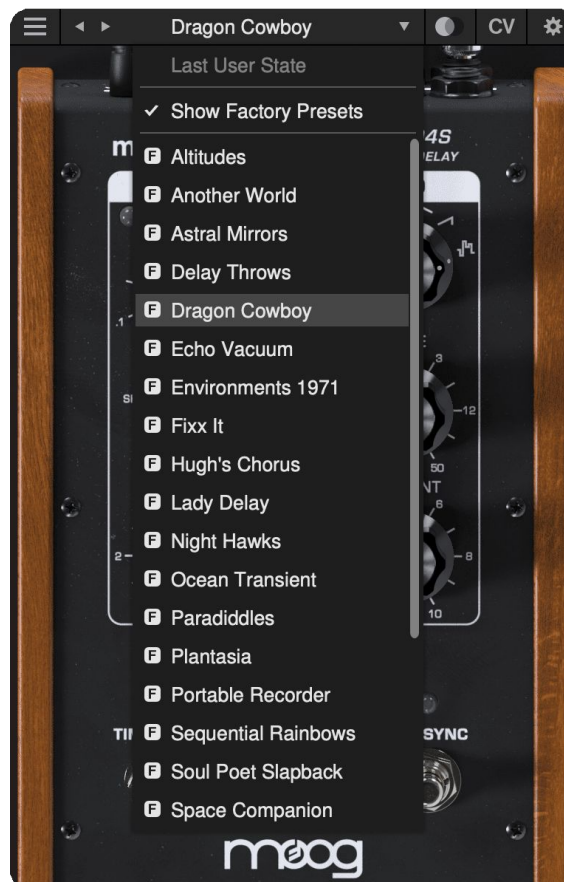
プリセット

ホストソフトウェアのプラグインプリセット管理システムに加え、MF-104Sには独自のプリセット選択と保存をするための使いやすい内蔵ブラウザが装備されています。

現在選択中のプリセット名は、プラグインUIウィンドウの上部に表示されます。プリセット名左側の左右の矢印ボタンのクリックで、プリセットリストを順番に切り替えることができます。プリセット名右側の下向き矢印ボタンのクリックで、リストを展開し、すべてのプリセットを表示します。

Last User State

プリセットドロップダウンメニューの最上部のオプション「Last User State」は、直近の設定状態を扱います。保存されていないプラグイン設定に変更を加えた際にプリセットをロードすると、保存されていない変更は自動的にこのLast User Stateとして保存されます。このことで、既存のプリセットと新しい設定の比較を簡単におこなえたり、不用意な操作などでプリセット変更をしたりしても、直近の設定に戻ることができます。ただし、これは最新の未保存状態のみを捉えますので、ご注意ください。また、何か変更をした未保存状態は、現在のプリセット名の左側にアスタリスク(*)が示されます。




Show Factory Presets

メーカー提供のプリセットの利便性を好む方もいれば、音楽に自身のカスタム設定のみを使用することを信条とする方もいます。「Show Factory Presets」のチェックを外して、工場出荷時プリセットを非表示にし、このドロップダウンリストにユーザー独自のプリセットのみを表示することができます。「Show Factory Presets」の表示がチェックされている場合、工場出荷時セットを含むすべてのプリセットがリストに表示されます。工場出荷時プリセットは、プリセット名の左側に[F]アイコンでそのことを示します。

Compareスイッチ

プリセットドロップダウンの右側には、最後にロードされた状態と最後に変更された状態の切替えて比較に使用するCompareスイッチがあります。プリセットをロードし、それを確認と変更を、Compareスイッチのクリックで、プリセットの元の状態と最新の変更を切り替えます。

プリセットメニュー

プリセットメニューは、プラグインUIウィンドウの左上隅にあります。アイコンをクリックすると、プリセットメニュー  が表示されます。以下のオプションが利用可能です：

- ◆ **Init Preset** – 設定を初期化したINITプリセットを開きます。サウンドデザインの出発点に便利です。
- ◆ **Save Preset** – 現在の状態をプリセット保存します。実行をした場合、それまでのプリセットの状態が上書きされます。
- ◆ **Save Preset As...** – 現在の状態を新しいプリセットとして名前をつけて保存します。
- ◆ **Delete Current Preset** – 現在のプリセットを削除します。ただし、工場出荷時プリセットの削除はできません。

注：プリセットファイルをプラグインUIにドラッグ&ドロップすることで、設定を自動的に取り込むことも可能です。

- ◆ **Export State** - 現在の状態を任意箇所に新しいプリセットとして保存します。実行をするとコンピューターのファイルシステムダイアログが開き、そこから任意のフォルダを選択(あるいは作成を)して、ファイル保存します。(通常の「Save Preset」と「Save Preset As...」によるプリセット保存は、自動的にプラグイン独自のプリセットフォルダにファイルを置きます)。
- ◆ **Open Presets Folder** - プラグインのプリセットフォルダ(Presets)を、システムのデスクトップ(Finderまたはファイルエクスプローラー)に表示をします。
- ◆ **Open Manual** - 本製品の英文マニュアルをウェブブラウザで開きます。
- ◆ **Contact Us For Help** - Moog Musicのカスタマーサービス・ウェブサイトアクセスします。

サポート

MoogerfoogerエフェクトプラグインはmacOS 10.13 / Windows 10以降のシステム用に設計されています。

VST3、AudioUnits、AAX形式のプラグインとして利用できます。

Moogerfoogerに関するお問い合わせは下記ウェブサイトよりご連絡ください。

株式会社メディア・インテグレーション MI事業部 カスタマーケア

ウェブサイト：<https://support.minet.jp/>